

---

# Fairy Tale e.p.

藤森優斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fairy Tale e.p.

### 【Nコード】

N5750H

### 【作者名】

藤森優斗

### 【あらすじ】

温かくも脆く、冷たくも優しい詩の中の登場人物。『White Breath』に続く詩集。

## story in the sunflower

金色に広がる世界 「私と貴方の心は重ねて一つ分だ」と  
心臓が左に付いた 「私と貴方の身体は一つの様ね」と  
抱きしめて 笑った あの頃は……

何処までも広がるような ひまわりの世界  
子供の頃 出会った場所だった

「貴方が鬼ね かくれんぼしようよ」  
十数えて振り返り 君を探すよ

ああ そんなの反則だらって 背の高いひまわりより小さい君は  
見つける術もないな 呆れながらも笑う 矛盾の想いは

見つけて逢える事が嬉しかったんだよ  
僕は黄色いこの世界でも 君を見つけられるから  
だって いつも 同じところに居るのだもん  
一番背の高い あの ひまわりの後ろに

「見つかったちゃった」って笑う君は その幸せを僕にも分けていた  
二人で一つ分でしょ？ 「私と貴方はいつまでも一緒なんだ」と  
君は笑った

近くに落ちていたカメラ 残り枚数は一枚だ  
「ちゃんと撮らないと」 精一杯腕を伸ばして  
小さなフレームに 二人分の笑顔を写すよ  
大人になっても この想いを忘れないように

ああ 「それじゃあ、私は帰るね」って 大きく手を振って走り去

る君に

ずっと手を振っていた 名残惜しくなる 単純な想いは……

その日を境に君に会えなくなった どうやら心臓は一つになったようだ

片方だけ生きるなんて そんなの辛すぎるよ 涙が超えた 子供遊びの向こう

ひまわりが無くても見えない君の姿 かくれんぼは終わりだよ？ ひまわりのせいにして探してみる 一番背の高いひまわりの後ろ

ああ そんなの反則だろうって 僕はずっと鬼のままになるよ？ 君を見つける術はないか？ 泣きながらも笑う その写真の中は……

「見つかった」って笑う君は 愛しさも哀しさも教えてくれたね

二人で一つ分でしょ？ 写真の中では 今も二人 あの頃的笑顔のまま

金色に広がる世界 「君に出会えて良かった。今も一つ分だ」と 心臓は左に付いた 「僕は大丈夫だよ」 右側に微かに残るぬくもりと

生きていく事にした 笑った あの頃のように……

## キャンディー・ソング

遠い何処かで何をしているかは いつになっても分からない  
そんなことより あの子が欲しがった キャンディー探さないと

「さようなら、って何だか嫌な言葉だね」って君は苦笑いで言った  
だから君は 毎日別れには「またね」って言うんだね

何億年も前から君に出会っていたのかな  
初めて見た時 なんか「これは」って気がしたよ

大きなキャンディー舐めて 君は笑って言った  
「明日もまた会おうね」って言った

言っただ

あの子は何処かで何をしているかは 分からない  
走るライト あの子が舐めていた キャンディー 割れちゃった

何億年も前からもう決まっていたのかな  
身動き出来ない恐怖感 何故か美しくて

大きなキャンディー舐めていた 君は嘘つきだ  
「さようならは嫌いだ」って言った

言っただのに

君はまだキャンディー探しているのかな  
君はまだキャンディー舐めているのかな

「さようならは嫌い」って言ったのに  
僕に言わせるなんて 卑怯じゃないか  
だから その言葉は閉まって 僕が好きな言葉  
「ありがとう」と言うよ

何億年も前から君に出会っていたのかな  
違和感のない 何か「いいなあ」って気がしていた

大きなキャンディー舐めていた 君は笑って逝った  
少なくとも僕が見た君の最後は 綺麗な笑顔だったんだよ

大きなキャンディー舐めて君は「またね」って言った  
その言葉を信じるよ 僕は精一杯生きて 君に会いに行くよ

遠い何処かで何をしているかは 死んでみないと分からない  
そんなことより あの子が好きだったキャンディー 探さないと

## モグラ

嘘を貰うから 人を信じて  
その言葉使って 人を騙した  
怯えて潜る 逃げ身の穴は  
掘っても 掘っても モグラも無い

金を払うから 獲物逃がして  
その獲物捕って 倍金取った  
恐らく 此处は この身の中に  
犯して 犯して 溶け込んだ

何億年も懸けた 命を僕は「要らない」と言う  
虚ろな目だから まだ 死んでるか分からない

だから 何て言われようと 僕は僕  
髪切って 姿変えようが 一年中 僕は僕  
離れ離れ この身と心 逃げる時は一緒  
大体 在るべき所は同じ それに嘘はない

傷を庇うから 体丸めて  
転がる先では 頭を打って  
だから 何だ？ 繰り返し事に  
たぶん 意味は無いにしよう

無くさないように 大事に溜めて隠しても  
新しい物が何か もう 貰えやしないから

誰が何て言われようと 僕は僕

骨折って 形失っても それでも 僕は僕  
試行錯誤 繰り返しでも やはり 何も変わらない  
それだし 何が起ころうとして 夜に雨は来ない

この穴掘って 何が繋がろう 出会い頭の中  
この穴掘って 何を当てよう 一か八かの中

何も見えないが 獲物なら すぐに見つけてやろう  
何も見えないが それだからこそ 何が見えよう

たった一秒だけで 腐る事を恐れてから  
たった一秒に懸けた 命の意味は 計り知れない

散々 掘って 埋もれそうでも まだまだなんだ  
噛み切って 流れた血なら 生きてる事が すぐ解る

だから 何て言われようと 僕は僕

髪切って 姿変えようが 一年中 僕は僕  
離れ離れ この身と心 逃げる時は一緒  
大体 在るべき所は同じ それに嘘はない

人が掘る 穴の中 そこに嘘はない

何処にも 嘘はない

こんな世界なら 嘘はない



## メイデン＋メルヘン

呼吸を一回行った　その時から歴史が始まった  
嫌になった数だけ　呼吸を裏切る覚悟をした

心臓が一回動いた　その時から歴史が始まった  
錆びてく事を知って　その一瞬の意味を知った

0に近づいた分　価値は数字に出来ない  
でも1から遠ざかったから　彼は裏切る

メイデン＋メルヘン　創られた　そんな人生やっていけない  
泣きたい時はどう笑えばいい？　心の奥でそつと笑えばいいの？  
動かない時計の針　それでも時間は進んでいく　止まらずに

出会いが一つあった　その時から世界が広がった  
見える景色も背が伸びるに連れて広がった

涙が一つ落つこちた　その時から悲しみを知った  
背が伸びるに連れて感じる苦しみは増えていった

細かく刻んだ自分の足跡  
その幾つに挫折し手形が付いた？

メイデン＋メルヘン　試された　神の悪戯で変わる世界  
恨めるのなら誰を恨めばいい？　憎めるのなら誰を憎めばいい？  
見失った後ろの足跡　それしか思い出の根拠がない　頼れずに

失くしてしまった　遠く消えた背中

閉ざしてしまつた 近く開いた扉  
その一瞬の時の中で幾つの笑顔と会えた？

メイデン＋メルヘン 創られた 自分で作り上げた人生  
泣きたい時は泣けばいい 笑いたいのなら笑えばいい  
動かない時計の針 それが教えてくれた生きる業 忘れずに

メイデン 仕込まれた 寂しいと思う感情を  
メイデン 仕込まれた 嬉しいと思う感情を

一人で生きていかにように 時計の針が二本のように  
一人じゃ何か出来ないように 分時を刻めないように

## 2 people

一昨日ね お得意の音符を並べて 静かに唄が出来たんだ  
寄り添いそう お互いの気持ちを訪ねて 静かに口付けしたんだ  
君だって 昨日は笑う明日に憧れてた  
僕だって 昨日は笑う君を待ち望んだ

いつだって 傷をつけあって  
いつだって 血を流しあった  
いつだって 傷を庇いあって  
いつだって 血を擦りあった

お気に入りの ブルース音楽を流して 奇跡に近い感動を知ったんだ  
溶け合いそう お前の体温を感じて 奇跡に近い生命を知ったんだ  
君だって 昨日は違う世界に憧れてた  
僕だって 昨日は違う世界を望んだ

血だらけの姿で 僕等は愛を求め合って  
血だらけの姿で 僕等は愛を分かち合った

何も知らない世界で 嫌々ながらも生きていて  
何も知らない世界で 愚痴を吐きながらも生きている

いつだって 傷をつけあって  
いつだって 血を流しあった  
いつだって 傷を庇いあって  
いつだって 血を擦りあった

一昨日ね 女の人がビルの屋上から 綺麗に落ちていったんだ

間に合いそう 狂った姿を見詰め合つて 静かに笑いあつたんだ

君だって 昨日は死ぬ覚悟で生きていた  
僕だって 昨日は死ぬ覚悟で生きていた

君だって 昨日は温かいそれを預けていて  
僕だって 昨日は冷たいそれを埋めたんだ  
君だって 昨日は笑う明日に憧れてた  
僕だって 昨日は笑う君を待ち望んでた

いつだって 変わった世界に憧れてたんだ  
いつだって 違った世界を望んでたんだ

## アナタソナタ

嫌になる訳じゃない 世界を恨む訳じゃない  
ただ 自分が嫌いなだけ それだけの事  
聞こえない訳じゃない 耳を疑う訳じゃない  
鼓動がやけに煩いだけ それだけの事

ああ 君が奏でる旋律は心臓のようだ  
僕的全細胞に伝わるように 血を流してる

「貴方が生きている事で 私が生きていける事です」  
天秤が等しく傾いた その答えが全て

くだらなくなつた訳じゃない 死にたくなつた訳じゃない  
ただ 何かが違うなつて それだけの事  
無視してた訳じゃない 知らなかった訳じゃない  
ただ 何かが崩れてるつて そんな気はしてた

ああ なんて素晴らしい景色なのだろう  
なんか死んでもいいのかも そんな気もした

「貴方が聴いている事で 私が生きていける事です」  
心臓を突き刺した 溢れる血が濃くて

黒くなつた その日々が 赤い 赤い その姿  
白くなつた あの日々が 赤い 赤い あの姿

何か嫌なんだつて 何か違つてんだつて  
そんな気がしていた 分かつてたんだ

崩れていく世界が 狂っていく世界が  
訪れてしまう 世界の果てに

ああ 血が足りない 酸素が足りない 死にそう  
ああ 血管を震わす振動が生きている事だ

僕が生きている事で 私も生きている事だって  
天秤が傾いた その正確性が世界だ

私が鳴らす音で 貴方が聞き取る事で  
血は流れていく 赤色を濃くもって

何か違ってた 何か変わってた  
でも 別にいいやって  
何か違ってた 何か変わってた  
でも 別にいいやって

それでもいいやって  
気にしてもいいって

## 終わりの果てに

誰もが全部 くだらないと思っていた  
良い奴なんて 一人もないだろうって  
吐き気が迫る 真っ暗な朝の中  
何か違うかなって 生きにくいかなって

何もかもが もう終わっていく  
跡形も無く 全て 消えてしまう  
白い夜の中 手首を切って待つ  
彼女が何処か 綺麗に見えた

不思議と上手くいっている 間違いじゃないはず  
それでも 何か違う気はした 違和感があった  
夜は暗い気はしない 朝は何故か暗かった  
死ぬのかなって考えて寝て やっぱり 起きたんだ

何だかんだ もう終わってもいい  
後戻りの出来ない なら いらない  
モノが多すぎるだろ そして裂く  
彼女は笑った 血を流して

ああ みんな 頭イっちまってる 狂ってる  
彼女はいつも言っていた 「私はこの世界にいらないの」  
ああ みんな 頭イっちまってる 狂ってる  
彼女はいつも言っていた 「私が生きてると迷惑でしょ？」

触って嫌がるな お互い汚れた両手だろ？  
あの子だって汚い それでも綺麗に見えるんだ

触って嫌がるな お互い汚れた両手だろ？

あの子だって汚い だけど好きになっただんだ

どうやら世界は終わるらしい その後はどうするのだろうか？

何も残らないわけが無い 一体 何が残るのだろうか？

世界が終わる その前に 彼女は自ら逝っただんだ

赤く染まる姿を見て 綺麗だと思ったんだ

死んだ彼女の姿を見て 生きていこうと思ったんだ

忌んだ彼女の姿を見て 終わらないかもって思ったんだ



## Under Line

今日のような日 笑う事も忘れそう

大切な物を失くしたの？ 最初から無いくせに

今日のような日 言葉すらも忘れそう

大した期待は受け入れない 答えられやしないから

一体 何をすればいい？

心などとづくに粉々になつて

今更 何と言えがいい？ 綺麗に死んだ感情の果てで

笑いながらも 一人で生きてきたのは 嘘じゃないさ

殺しながらも 一人を守つてきたのは 嘘じゃないさ

滅びた精神 誰かが今頃死んでも

一つも俺には関係ない 迷惑もかからないだろう

滅びた精神 俺がその内死んでも

一つも世界に関係ない 気にする人もいないでしょう？

一体 何を捨てればいい？

持ち物の無い手駒の中で

尚更 何か捨てればいい

綺麗に投げる その身の価値を

腐りながらも 一人で生きてきたのは 嘘じゃないさ

壊れながらも 一人を使つてきたのは 嘘じゃないさ

何に線を引けばいい？

大事な所にアンダーライン

何に線を引けばいい？

大事な所にアンダーライン

すごいよね 手首を切って 笑顔の彼女  
すごいよね 手首を切って 綺麗な彼女

笑いながらも 一人で生きてきたのは 嘘じゃないさ  
殺しながらも 一人を守ってきたのは 嘘じゃないさ

死にたいね 死んでみたいね  
皆 そう思ってたんだ 誰だっと思ってんだ  
死にたいね 死んでみたいね  
皆 そう思ってたんだ 誰だっと思ってんだ

結局ね 全部に引いた 失って 悲しくなって  
結局ね 全部に引いた 失って 寂しくなって

## DEATH MEET YOU

手を挙げなよ もう 君の番だよ  
逃げたつて無駄だから 居場所はずぐ分かる  
頭下げなよ ほら バレたんだよ  
隠れ家なんて いつもそこ 少し学習しなよ

遠退いた分 減らす何かがある  
増やす事も容易じゃないさ

お手上げだろ 目隠し辞めなよ ちゃんと前を見てみろよ

迎えに来たよ さあ こっちおいで  
パレードに参加しよう

吐き気するだろ？ まだ 君の番だよ  
死ぬ暇なんてないくらい 忙しければいいのに  
嫌気さしたろ？ もう 飽きたつて

綺麗に生きる術なんて 持ち合わせてないのに

変わらない日常の中で 変わっていく精神だけが  
叫んでんだろ 悲鳴を上げて 心臓よりデカイ音で

迎えに来たよ さあ こっちおいで  
バレてるけど 無効に死

生きているのは間違いじゃない 彼女は呼吸を繰り返して  
死んでみたいのは嘘じゃない 彼女は呼吸を裏切って

腐りそう アンタの賞味期限は過ぎてるだろ？

だけど まだなんだ 消費期限はまだ来てない  
苦しそう アンタは人口呼吸ばかりなんだよ  
だから 気も失って 生きてる事を知ってんだろ

汚れた手で綺麗に触って 汚れた彼女と綺麗に死んで  
何もかも この命が この心臓が 血を流して  
デカイ音で叫んでるから

迎えに来たよ さあ こっちおいで  
まだ 温かい体温が

迎えに来たよ さあ こっちおいで  
中途半端に見える明日が

迎えに来たよ さあ こっちおいで  
無視して 裏切られた日には

迎えに来たよ さあ こっちおいで  
パレードに参加しよう

何も無い部屋が寂しく感じなくなった  
助けの手なんて 握らないんだと  
とても緩やかに だいぶ、ゆつくりと  
だけど 確実に崩れているんだって

全てが終わるのは もう明日なんだって  
考える暇も無く 彼女は綺麗に笑う  
大事なCDを持って 思い出のアルバムを持って  
逃げてても無駄だが 彼女は綺麗に走る

気持ち悪くなるくらいに幸せだったかも  
不幸中なんだし 幸いなんて見つけれられない  
今日もはつきりと 昨日もしっかりと  
犠牲を出して 回ってる世界だから

全てが終わるのは もう明日なんだって  
欠伸をしながら 彼女は可愛く笑う  
手首を切り裂いた後 首を絞めた後  
血を流しながら 彼女は可愛く歌う

何かが違っていく事を肌で感じていた  
取り返しのつかない 生活を繰り返して  
何処か違和感を経て 何時か劣等感を出て  
そして 何もかも腐り果てるのだろう

全てが終わるのは もう明日なんだって  
脚を攣りながら 彼女は美しく死ぬ

ガムを食べながら アメを舐めながら  
思い返しては 彼女は美しく死ぬ

誰も悪くない だけど狂っていく 救いようの無い世界が終わる  
何も出来てない だから生まれていく 救われようも無い存在だからこそ

全てが終わるのは もう明日なんだって  
考える暇も無く 彼女は綺麗に笑う  
大事なCDを持って 思い出のアルバムを持って  
逃げてても無駄だが 彼女は綺麗に走る

全てが終わるのは もう明日なんだって  
一息ついては 彼女は綺麗に笑う  
好きな唄を唄って 思い出の唄を唄って  
世界が消える時 彼女は綺麗に笑う

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5750h/>

---

Fairy Tale e.p.

2010年10月28日03時13分発行